シンポジウム開催報告

開館30周年記念シンポジウム 「魅力ある美術館とは」

去る11月3日、盛況のうちに終了した上記シンポジウムの開催までのいきさつやパネルディスカッションの概要、参加された方の感想などをお届けします。

《第1部》 基調講演 「私の空想美術館」 真野響子さん(女優)
《第2部》 パネルディスカッション 「魅力ある美術館とは」
パネリスト◎真野響子、滝沢具幸(飯田市美術博物館館長)、増田幸雄(浜松市美術館館長)、
金原宏行(豊橋市美術博物館館長)、神野吾郎((株)サーラコーポレーション代表取締役)
コーディネーター◎富山秀男(美術評論家)

私の空想美術館 ―真野響子さんをお迎えして―

須見テル子(友の会30周年記念事業実行委員長)

基調講演をする真野響子さん

真野響子さんは、じつにエネルギッシュな人だ。最近の真野さんは、08年12月、随筆家・白洲正子の没後10年を追悼する新作能「花供養」に、アイの語り手として宝生能楽堂に登場。平成の白洲正子になったのである。また同年、「巨匠ピカソ展」にちなんだテレビ朝日の特別番組でピカソについて熱く語っていた。今年10月には、東京都美術館の「冷泉家　王朝の和歌守展」で真野さんと朝日歌壇選者の佐々木幸綱氏との特別対談があり、俊成84歳の歌論書「古来風躰抄」が大好きだとおっしゃっていた。さらにNHK教育テレビ「日めくり万葉集」の選者をつとめ、山上憶良の「憶良らは　今は罷らむ　子泣くらむ　それその母も　我を待つ」を取り上げている。そして、美術館連絡協議会ニュースの100号記念エッセイでは、「美術館があったから死なずにすんだと言ってもいい。死にたくなるほど打ちのめされたときに、どれほどの作品に救われたか知れない」と、美術館と共に育った一市民として、ご自分を語られた。NHK「日曜美術館」の司会をつとめられたことは周知のとおりだが、女優のほか文化人としても多方面で活躍される真野さんに、ぜひお話をうかがってみたいとの思いからこの企画はスタートした。

話は前後するが、美術博物館の開館30周年を記念し、友の会との共催でシンポジウムを開催する計画が昨年持ち上がった。「魅力ある美術館とは」をテーマに、基調講演とパネルディスカッションで構成。講師には芸術に造詣が深い真野響子さんをお招きしたいということになり、無理を承知でお願いをしてみる。多忙なスケジュールにもかかわらず、「私でお役にたつのであれば」と、快いお返事が返ってきた。ちょうど1年前の11月のことである。

年が明け今年の1月、館の喫茶店で雑誌を読んでいると、『婦人画報』新年号に、真野さんが「私の空想美術館」というテーマで連載を持ち、館長を1年間つとめるとある。なんとタイミングの良いことか。どんな作品が選ばれ、どんな解説が添えられるのか楽しみになった。第1回は、白洲正子所有の面「是閑の増女」(現在は梅若家に寄贈)であった。

準備に入ってからの月日は早いもので、すぐにシンポジウムの日がやってきた。当日真野さんは、キャリーバッグの上に大きなボストンバックを乗せて、ロケ先の松山から飛行機と新幹線を乗り継いで一人で豊橋にやって来られた。会場満席の中、講演が始まり美しい真野さんが登場、空想美術館にはいろいろな分野の作品があり、画像と共に紹介された。歯切れの良い口調でわかりやすく説明してくださり、その軽妙な話術に会場には笑い声も響き、彼女にすっかり魅了されてしまった。

「私の空想美術館」の連載は好評により、来年1年間続投されるとのこと。とても嬉しく思う。今年2月号以降に紹介された作品は、「昇りゆく天使たちの壁(ヤン・ファーブル作)」「乙女頭部(川端康成所有の古墳時代の埴輪)」「葡萄を収穫するアモールのタペストリー」「野菜のテリーヌ」「市川亀治郎の手」「スタンディング・ウーマン(ロン・ミュエク作)」「フロア・スタンド　葦と蜻蛉の装飾」「染付漆飾花束菊文蓋付大壷(有田焼)」「時の航海　木馬から天馬へ蜂がパイロットの偵察機」など、美術作品のみならず料理や人間の手までもが登場する。この多彩な作品選定には真野さんの柔軟な感性が表れており、解説も作品の写真も見ごたえがあった。最後に真野さんは、「さまざまな角度から美術館を楽しんで下さい」と締めくくられた。

このシンポジウムをきっかけに、多くのみなさんに、魅力ある美術館、新しい美術館の可能性を考えていただけたらと思う。

パネルディスカション

●それぞれの館の特徴や取組みについて

金原館長(豊橋市)　美術や歴史に広く親しんでいただこうと、開館当初から常設展は無料である。企画展もバラエティに富んだジャンルを扱い、海外展も含めニーズの高い企画も開催していきたい。しかし展覧会だけでなく、学芸員の仕事としては調査研究が大切。郷土作家を中心に美術史を再検討することも忘れないよう留意している。普及活動にも積極的に取り組み、ワークショップやコンサート、ボランティアガイドによる作品解説などを行い、多くの人々が楽しめるよう努め、市民が必要だと思う美術博物館をめざしている。私の方針は、職員全員が美術博物館の「広報マン」たること。

増田館長(浜松市)　市町村立としては全国で8番目にできた美術館。開館して38年になる。市民が建設資金を集め、ガラス絵、浮世絵、大津絵など民画のコレクションから始まり、中国・朝鮮の陶磁器や石仏・金銅仏のコレクションの寄贈も収蔵品の特徴となっている。開館当初から版画の全国公募展を開催、振興に寄与してきた。商店と協力し街中に子供たちの絵を展示したり、野外や廃校で美術展を開いたり、夜のイベントやジャズコンサートを企画するなど、美術館外でのアート活動の支援を行い、愛好者を増やす活動も重要。いよいよ新美術館建設を進めることになり、現在基本構想を策定中。

滝沢館長(飯田市)　昭和63年に開館し、20周年を迎えた。基本テーマは「伊那谷の自然と文化」「自然と人間の融合(フュージョン)」。伊那谷の自然に恵まれ、昔から芸術・歴史・文化が栄えた土地。日本画の巨匠・菱田春草と博物館の父・田中芳男の生誕の地でもある。春草を中心に優れた作品を収集、美術部門のほか自然部門、人文部門と幅広い領域の文化施設である。市民の皆さんと協力し、調査・研究・収集・交流の場となることをめざしている。

●利用者の立場から、魅力ある美術館とは？

神野　街の特徴とフィットし、コンセプトもはっきりしている美術館がよい。長崎県美術館やスペインのビルバオ・グッゲンハイム美術館は街に溶け込み、社会とつながっている好例。ひとつの作品、ひとつの美術館で街が変わることがある。どういう街や美術館にしたいのか、地域との関係を考え議論する必要がある。

真野　常設作品に目玉があり、企画展が面白いこと、建物が主張しすぎないことが条件。鑑賞中にはいい所で椅子や飲み物がほしい。収蔵品の購入は100年もつ作品か考えて買うべき。市民や土地の人がその街を楽しんでいれば、旅行者にとってもその美術館は楽しいはず。好きな絵の前で結婚式が挙げられる美術館もあり、市民レベルで関心を持ち、利用の仕方を工夫し、議論すること。友の会に入ることも大事。美術は喜びであり、こやしになる。見極める目、観る力を養い、良い物をつかんでほしい。

シンポジウムに参加して

加藤浩子(1037)

日頃の疲れを癒したいと軽い気持ちで聞いていたシンポジウム、原稿依頼など予期していなかった私ですが、思うままに感想を記します。

第1部の真野響子さんの基調講演「私の空想美術館」での歯に衣着せない話しぶりは、さすがと共感することばかりでした。

第2部の「魅力ある美術館とは」のパネルディスカッションでは、豊橋・浜松・飯田の各市の美術館長がそれぞれの館の特徴や独自の取組みについて丁寧に話されました。市民代表の神野吾郎さんは、海外の美術館のように街とつながりを持つような美術館をと話され、若さと未来を感じました。真野響子さんは、芸術作品を見る目を養うことの大切さを強調されました。

私たち友の会の会員は、鑑賞する力をつけることだと痛感いたしました。それには、いろいろな美術館に足を運び多くの美術に接すること。そうしているうちに、自然と知識が豊かになり、感性が磨かれていくのだと思います。一人ひとりの努力がすばらしい美術館にする原動力となることを願います。まず家庭から、特に子供に良いものを見せたいと思う親の愛と、豊かな心を育む家庭こそ美しい日本の文化の原点であると思います。

響き合ふ　シンポジウムや　文化の日　　浩子